

タイトル	世界遺産登録に伴うストーリーの創出とその問題点： “長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産”の事例から
著者	鈴木，英之；SUZUKI, Hideyuki
引用	北海学園大学人文論集(67)：46-53
発行日	2019-08-31

【各論 3-2】

世界遺産登録に伴うストーリーの創出と その問題点 ― “長崎と天草地方の潜伏 キリシタン関連遺産”の事例から ―

鈴木 英 之

日本文化学科の鈴木でございます。

ここからは、世界遺産登録に伴うストーリーの創出とその問題点というお話をします。私の専門は日本思想史で、神道や仏教、さらに神仏習合を専門とすることから、外来のキリスト教が日本の宗教と接触する過程に興味を持っています。夏に仲丸先生・小柳先生と研修旅行に行ってきたのですが、そこで現地を見た感想をもとに、世界遺産登録の問題点について簡単にお話ししたいと思います。

まず前提からお話しすれば、世界遺産に登録されるには、顕著な普遍的価値が必要であるとされています。これは、いつの時代、誰が見ても文句なしにすばらしいという価値のことですが、最近では、シリアルノミネーション（連続性のある遺産）という登録方法、すなわち、単体の建造物ではなく、文化や歴史的背景などが共通する複数の遺産を一つの遺産とみなして、そこに顕著な普遍的価値を有すると判断し、登録する手法が多く取られています。

要するにモン・サン＝ミシェルであるとか、サグラダ・ファミリアとか、単独の建造物だけで一つの遺産として登録するのではなく、日本でしたら「紀伊山地の霊場と参詣道」とか「明治日本の産業革命遺産」というように、複数の遺産を一つにまとめて登録するというのです。

シリアルノミネーションで登録されるにはどうすればいいか。世界遺産アカデミーの本田陽子さんによれば、「顕著な普遍的価値」をもつストー

リーをしっかりと組み立てて、時代や性質の異なる遺産を一連のものとして過不足なく含めることが求められる」（同「なぜ「長崎の教会群」は世界遺産への“推薦取り下げ”になるのか」<https://news.mynavi.jp/article/20160205-heritage/> 2018年6月28日閲覧）とされます。つまり、複数の遺産を、ひとつの世界遺産としてまとめあげるストーリー（演出）が必要だということです。ここで重要な役割を果たすのがイコモスです。

世界遺産に登録されるには、通常、各国政府から推薦された遺産に対して、専門家の視点から評価がくだされ、その結果をうけて世界遺産委員会に勧告し、投票の結果、最終的に登録が認められるという流れになります。このうち、イコモスが評価・勧告を行うため、イコモスは世界遺産登録に対して非常に強い影響力を持っています。

長崎県は、2007年から教会群の世界遺産登録に向けて活動しており、近いところでは「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」という登録名で世界遺産の登録を目指していました。しかし、イコモスの中間報告の結果が芳しくなかったため、推薦は2016年2月に一旦取り下げられています。

2016年1月に出されたイコモスの中間報告によれば、「個別の遺産が全体の価値に貢献していることの根拠説明が不十分である、禁教期に焦点を当てるべき」とされています。つまり、キリスト教の信仰が禁教下で200年以上も継承されたという遺産全体の価値が、禁教後に建てられた教会群では証明できない、もっと禁教期の宗教活動に焦点を当てるべきだということです。

当たり前ですが、教会は潜伏しているときに建設することはできません。教会群はすべて禁教後の建築ですから、全体の価値を説明するには、教会群だけでは不十分だということです。要するに、教会群を一連のものとして過不足なく含めて登録する、シリアルノミネーションするためのストーリーが不足しているのだということです。

そこで長崎県は、評価する立場にあるイコモスとアドバイザー契約を結び、「長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に名前を変更して再び登録を目指します。キーワードは「潜伏キリシタン」です。

現在、隠れキリシタンは大きく二つに分類されています。潜伏キリシタンと片仮名のカクレキリシタンです。キリスト教が禁教され、1644 年に最後の宣教師が殉教した後、禁教が解かれるまでの間を禁教期といいます。潜伏キリシタンは、キリシタンであることを隠して潜伏していた信徒のことで、禁教期のキリシタンのことを指します。

片仮名のカクレキリシタンは、禁教終了後、信仰の自由が認められてもカトリックに合流せず、潜伏時代を引き継ぐ形で独自の信仰を保持している人々のことを言います。ですから、今もカクレの信仰を継続している人は、カクレキリシタンに分類されることになります。長崎の信仰は、一部の人はカトリックに復帰して教会を建設し、一部の人はカクレキリシタンとして残り、また一部の人は仏教、神道などの他宗教に移るという流れで現代に至っています。

さて、今回の登録に当たって、長崎県は、キリスト教の日本への伝来・拡大をめぐる 4 つの期間を提示しています。すなわち、Ⅰ伝来、Ⅱ形成、Ⅲ維持・拡大、Ⅳ終焉の四段階です。今回の登録は、禁教期の潜伏キリシタンに焦点を当ててストーリーが構成されていますが、面白いのが、終焉を示す象徴として、教会群が念頭に置かれていることです。

キリスト教の解禁後、かつての潜伏キリシタンたちは、次々と教会を建設しました。推薦書によれば、「これらの教会堂は 2 世紀半にも及ぶ禁教の下で長崎と天草地方の各地に形成された潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が当該集落において、終焉したことを象徴的に示す存在でもあった」と書いてあります。

要するに、どういうことかという、潜伏キリシタンが潜伏が終焉したことによって教会がつくられた。だから現在のこされている教会群すべてが、終焉の象徴であると主張するのです。これによって、伝来・形成・維持・拡大・終焉という大きなストーリーの中に、現在長崎県にある教会群すべてを漏れなく位置付けることが可能になったのです。

教会群を一連のものとして過不足なく含める。つまり、シリアルノミネーションをするというストーリーをここで描くわけです。

世界遺産に登録するには、こうした演出や誇張もある程度必要でしょう。しかし、それによる弊害も生まれます。ここで問題となるのは、カクレキリシタンです。

先にお話ししたとおり、カクレキリシタンは、カトリックに合流せず独自の信仰を維持している人たちのことを言います。彼らは、基本的には、公に信仰を布教することはありませんので、教会を建設しませんでした。もし今回の推薦書通りに、教会が潜伏キリシタンの終焉を象徴しているのならば、教会を建設しないカクレキリシタンたちは、未だ潜伏を終えていないことになります。

それゆえに、長崎の世界遺産構成資産の中にはカクレキリシタンについての言及がかなり少なくなっています。この偏りによって、現実の信仰との乖離が起きているのではないかと考えられるのです。

推薦書によれば「2世紀を超える世界的にもまれな長期にわたる禁教の中で、それぞれの集落では一見すると日本の在来宗教のように見える固有の信仰形態が育まれた」「潜伏キリシタンは、それぞれの集落において一見すると日本の在来宗教における信仰の仕方のように見える方法で、自分たちの信仰を継承する手法を戦略的に採った」とされます。

後で見ますが、神道や仏教的な要素・モチーフを数多く取り入れることで、キリシタンの信仰世界は形成されています。推薦書では「一見すると」とか「戦略的に」と述べていますが、こういうことを言うのは、禁教期の前に入ってきたキリスト教が正統なものであるという認識が大前提としてあって、それを2世紀半にわたって堅く隠匿した後、信徒発見の際に、正式なカトリックと再びつながったというイメージがうかがえます。つまり禁教時代も正統なキリスト教は保持されているが、それを隠すためにカモフラージュとして日本の在来宗教を用いたというのです。

しかし、カモフラージュと言い切ることはできるでしょうか。ここからは天草のキリシタン集落である崎津地域を例に考えてみたいと思います。

崎津にある崎津教会は、やはり禁教終了後に建築されたもので、現在の教会は、1934年に改修して建てられたものです。

崎津地域は、キリスト教が仏教や神道などの在来宗教と共存していた地域として知られています。神社があつてクリシタンたちもいて、お寺もある。教会自体は禁教後のものですが、それぞれ密接な関係を持っていたというふうに言われています。

崎津港資料館では、潜伏クリシタンの信心具が数多く展示されていました。例えば、柱の中に隠されているキリストが刻まれたメダイ（メダル）や、アワビの貝殻の中にマリア様が見えるということで信心具として扱われたもの、さらには和鏡や仏像などがキリスト教の神や聖人などにみなされて、ここに残されているよというような展示がなされていました。

こういうものに対して、崎津港資料館のボランティアガイドさんは、「潜伏クリシタンは、カモフラージュのために神道や仏教を信仰する振りをした」というふうに説明されていました。これは、明らかにさっきの推薦書の内容に沿った説明であり、しっかり勉強された知識を教えてくださいましたのだと思います。

しかしながら、どうも私には、先ほど言ったように潜伏に入る前に何だか正当なしっかりしたキリスト教があつて、それら禁教中も密かに継続しているのだけれども、見つかるはずいからカモフラージュをしているのだというふうにしか聞こえないのです。

しかし、仏像をキリスト教の神や聖人に見立てて信仰していることを考えると、こういうのはキリスト教の日本の変容とは考えられないのか。シンクレティズムの一つとして考えることはできないのかという疑問も沸いてきます。

ほかのものを見ると、近くの大江という地域の信心具、もう現代のものなのですが、大黒様が神棚に祭られています。この大黒様のお袖が天使の羽に見えるぞということで、クリシタンの天使に見立ててこれをあがめていたというお話もあります。

また、今富という集落では、^{さわぎ}幸木といって、お正月になると臼の中に煮しめを入れて、神様にささげるそうです、この杵が十字架を表しているとされます。

ほかに、大好きな像なのですが、今富のカクレキリシタンの信心具として、ウマンテラサマというものがあります。今富の山中から出土した天使像で、羽が生えています。禁教時代の像であることは間違いないとされますが、信仰形態の詳細はわかりません。

基本的な見た目は羽の生えたお地蔵さんにしか見えないし、刀で鬼（悪魔）を踏んづけているところなど四天王像みたいです。おそらくミカエルを意識した造像だと思われます。

ザビエルが日本で布教するときに、デウスでは日本人はなじみがなく理解できないだろうと考え、大日という仏の名前を仮につけたのだけど、仏の一種だと誤解されたため、慌ててデウスと呼ばせたという話もあります。そうしたことを考えると、どうもこういうのは習合の一形態と考えたほうがいいのではないかという気がするのです。

潜伏キリシタンたちは、神や信仰、教理について、ほぼ口伝で伝えていたそうです。したがって文字資料は殆ど残されていません。やはり、文字で書き残すと見つかる心配もありますし、またそもそも書き留める教養をもつ人も少数であったと考えられます。口承という不安定な記録・伝達方法をとっていたことや、ウマンテラ様のように仏教の影響を強く受けた作例を見ると、禁教前のキリスト教伝来から100年、200年たってしまったときに、正統なカトリックが残っている、仏教や神道などの諸要素はカモフラージュにすぎないとは、とても思えないのです。

また、この崎津集落の潜伏キリシタンですが、19世紀の初頭にキリシタンであることが公にばれてしまうという事態が起きます。そのときに「崎津村ヨリ差出候書付写」というのが著されました。いわゆる弁明書なのですが、こんなことを書いています。「何方江参詣仕候而も矢張“あんめんりゆす”と唱申候」と。訳すと「どこへ参詣しても、“アーメン、デウス”と唱えました」となります。つまり神社であったりとか、お寺だったり、どこに行っても私たちは“あんめんりゆす”と唱えます、これがキリスト教に関する言葉だったとは知らなかったと釈明するのです。

ほかには例えば、天草崩れとして高浜・大江・崎津・今富の4村にいる

5,000 人余りがキリシタンとして摘発される事件が起きます。

崎津では、住民の約 70% の 1,709 人がキリシタンとして摘発されました。そのときの弁明の言葉によれば「宗門心得違者（しゅうもんころえちがいのもの）」だから許してくれと言う。これは、どういう意味かという、先祖代々の風習でキリシタンのものとは知りませんでした、昔から行っているからやっていただけで、私はキリシタンではないのですよと言うのです。

先の書付の内容や、住民の 7 割が摘発されたことを考えると、禁教だからといくら潜伏して黙っていたとしても、キリシタンが多数いることは、統治者も住民も必ず知っていたでしょう。恐らく公然の秘密だったはずで

す。

キリシタンは見つかるみんな張りつけになって殺されるようなイメージを持ちがちですが、崎津は、表面化しなければ黙認するというような区域であったとされています。またもし 7 割もの住人を処刑したら、地域の運営が成り立ちません。ですから、結局この 1,709 人のうちのほとんどを、誤解していたのは仕方ないから「宗門心得違者」として、事を荒立てることもなく、穏便におさめたのです。崎津周辺の人々が島原の乱に不参加だったことも、このような処置がとられた理由のひとつといえるでしょう。

このように、公然の秘密としてキリシタンが扱われていたことは、結構あったようなのです。実は推薦書にも、天草崩れにおける黙認の話は記されています。しかし、実際にこれを観光に使うとなると、ほとんどのガイドブックや先ほどのガイドさんのお話もそうですが、カモフラージュだ、一見するとそのように見えるといった、紋切り型の説明になってしまうわけです。

イコモスの要求に沿って作成されたストーリーは、嘘ではないけれども、提示される情報に恣意的なものがあるため、日本化したキリスト教や、終焉を迎えていないカクレキリシタンが軽視される結果となっています。そして、ストーリーに沿った情報の取捨選択がなされ、先ほどのガイドさんのように、将来的に潜伏を強調したストーリーが一般化、標準化するので

はないかという危惧も考えられます。

もちろん、専門家はその都度しっかり指摘すればよいのですが、これが20年、30年たつと、それしか言われなくなるのではないかという不安もあります。

ですから、ほかの先生方もおっしゃっていましたが、世界遺産に登録されるというのは、本当にいいことなのか悪いことなのか考えなければいけないし、世界遺産登録とは何のためなのか、また誰のためなのかということを考える必要があると考えられるわけです。

私の発表は以上です。ありがとうございました。